視標「大谷、大リーグで本塁打王」

ＨＩＴからＣＲＵＳＨ　日本野球の固定観覆す

江戸川大教授　神田洋　2023・10・06

米大リーグの大谷翔平が、日本選手として初の本塁打王になった。通算３千安打のイチローやワールドシリーズ最優秀選手（ＭＶＰ）の松井秀喜ら名選手が残してきた足跡の中でも、本塁打王は特別な意味を持つ。

米国の野球ファンが最も好むのが本塁打を放つパワーだ。だからこそベーブ・ルースは永遠に最高のスターである。1998 年に 70 本塁打したマグワイアらの本塁打記録への挑戦は、薬物使用を指摘されながら、国民的関心を呼んだ。本塁打こそ米国民が信仰する力を象徴するものだ。

イチローが 84 年ぶりにシーズン安打記録を塗り替えた 2004 年、ニューヨーク・タイムズは偉業をたたえながら「シーズン安打記録には、野球のパワーナンバー（本塁打記録）のような華やかさはないが」とも付け加えた。

同じ年に松井を書いた同紙の見出しは「松井の真の実力はホームランを打つことではない」だった。活躍を好意的に報じても、日本時代と同じようには本塁打を量産できないことに言及した。

米国の新聞は長年日本野球の打撃の弱さを指摘してきた。強打者ゲーリッグの訪日を振り返った 1931 年 12 月のニューヨーク・タイムズは、日本選手の堅守を褒めつつも「打撃はまだ弱い」と述べた。終戦直後に野球による日本の再教育を主張した 45 年 9 月のニューヨーク・ヘラルドトリビューンは「実に敏しょうだが打撃力が弱いのが欠点」と評した。

41 年の真珠湾攻撃後には打撃力の評価を日本人批判につなげた。12 月 18 日号のスポーティング・ニューズ誌は「一流の守備力を身に付けたが、体が小さいためパワーヒッターになることはできなかった」と記し「国民的劣等感を隠すための横暴さ」が戦争に向かう攻撃性を生んだと主張した。

米国の報道は、友好時は弱者を教え導く立場で、敵対時はあざけるように、日本の打撃の弱さを表し続けた。

1908 年から 55 年のヤンキースまで、来日した米国のプロチームとの対戦成績は日本の５勝１９２敗５引き分け。打撃だけでなく、全てに劣っていたことは明らかだが、打撃の弱さばかりがクローズアップされた。

重さ１キロ近い木の棒を振り回して球をひっぱたき、誰よりも遠くへ飛ばす。それこそ米国人が考える最も大リーガーらしいプレーで、日本人にはまねできないという強い自負が過去の記事には表れている。

大谷の描写は、大リーガーらしさを伝えようとしている。打撃には「ｈｉｔ」だけでなく「ｃｒｕｓｈ」や「ｓｍａｓｈ」の動詞が多用される。訳せば全て「打つ」だが、英語ではボールを粉々にたたきつぶす強烈なイメージを読者に与える。

9月23日のニューヨーカー誌は大谷を特集し「常に頼りになるパワフルな打者で、大リーグで最も得点を生み出す選手になった」と評した。これが今米国で一般的な大谷への賛辞であり、そこには常にパワーという言葉がある。

もちろん大谷は日本選手の典型ではなく、飛び抜けた異質の存在である。それでも米国の記者が今後「日本野球」について書くとき、そこには日本の顔としてオオタニの存在があり、従来のイメージで描写することはできないだろう。投打二刀流でのプレーで歴史を塗り替えた大谷が、米国の視線も変えている。

× ×

かんだ・ひろし　1966年東京都生まれ。共同通信社記者として米国で長く大リーグを取材。2017年より現職。専門は米国スポーツジャーナリズム。